

【書評】 畑中幸子著『南太平洋の環礁にて』

——華人・ポリネシア人関係からの再読

河合 洋尚

畑中幸子

『南太平洋の環礁にて』

岩波新書、1967 年

海域アジア・オセアニア研究から再読する

2022 年度より人間文化研究機構のグローバル地域研究の一環として海域アジア・オセアニア研究プロジェクトが始動した。このプロジェクトの趣旨は、太平洋という「海」を中心に据えることで、アジアとオセアニアの連環世界を捉えることにある。言い換えれば、アジアとオセアニアを「地続き」ならぬ「海続き」として理解することが、海域アジア・オセアニア研究の趣旨であるといえる。

そのような連環世界を捉えるのに適した事象の 1 つが、オセアニアにおける「中国」世界の浸透と拡張である。オセアニアは、しばしばオーストラリア先住民と西洋人のせめぎあいの場として民族誌で描かれてきたが、他方で、中国、日本、韓国、フィリピン、インドネシアなどアジア各国からの移民の波を受け入れてきた地でもある。とりわけ中国系の華僑は少なくとも 19 世紀以前から交易などの理由でオセアニアを訪れていた。19 世紀半ばになると、彼らはプランテーション労働や商売などの目的で、オセアニアの島嶼部各地で定住しはじめた。

オセアニアの中国系移民を研究する学問領域として、華僑華人研究がある。オセアニアの華僑華人研究はそれほど多くはないとはいえ一定の蓄積があるが、この学問領域自体が「中国系移民」を主人公にする傾向があるといえるだろう。それゆえ、中国系移民を主人公としないオセアニアの民族誌は——たとえ中国系移民がたびたび登場するものであっても——華僑華人研究とは通常はみなされない。中国由来の日用品を使い、中国料理を日頃から食べるという状況は、今のオセアニアでは珍しくないが、それも華僑華人研究の対象にはあまりなっていないといえる。

だが、オセアニアの民族誌を読んでいくと、なかには中国系移民とのやりとりや中国由

来の物質について丹念に描かれている重要な研究もいくつかある。そうした先行研究を再評価していくのも海域アジア・オセアニア研究プロジェクトの課題の1つである。畑中幸子が1967年に刊行した『南太平洋の環礁にて』は、そのような古典書の1つである。

畑中は、フランス領ポリネシア（以下、タヒチと简称）のプカルア環礁やニューギニアを調査した人類学者であり、翻訳書にマーガレット・ミードの『サモアの思春期』（山本真鳥との共訳）がある。『南太平洋の環境にて』は、著者のプカルア環礁での調査経験を描き出した文庫本であり、難関な専門書の類ではない。筆者も学部生の時に本書を読んだことがあるが、当時は本書を南太平洋における人類学の調査紀行と認識していなかった。だが、後に芹澤知広先生（現・天理大学教授）に薦めていただき再読したところ、この本が中国や華僑華人研究に従事してきた者にとって価値の高い一冊であることに、改めて気づかされた。

『南太平洋の環礁にて』にみる中国系移民の描写

まず初めに本書の章構成をみていくとしよう。各章のタイトルは次の通りである。

- I ポリネシア人を探しに行く——フランス領ポリネシア
- II コブラが先か人間が先か——タヒチ島からプカルア島へ
- III 他人のものは我がもの——小さなコミュニティ(人間集団)
- IV 時間が流れない——荒涼たる世界
- V 招かれざる客——人間の偉大な生命力
- VI 太陽はプカルアをめぐる——人間は年をとらない
- VII 思いついたら最後——一文なしの放浪の旅

一目見て分かる通り、本や各章のタイトルには「中国」「華僑」「華人」の文字が一つもでてこない。前提として、本書はタヒチの華僑華人を対象とする民族誌ではない。しかしながら、本書は、著者がプカルア環礁で知り合った李寿やその家族とのやりとりに相当なページ数が割かれている。

李寿は、プカルア環礁で商売を営む現地の富裕者であり、畑中が調査時に住んでいた家を貸借した人物でもある。畑中によると、李寿は中国広東省の出身で、1914年に香港を出て神戸、ハワイ経由でクック諸島のラロトンガに行ったが、そこには2人しか華僑がいなかったため居住が許されなかった。そこで、自由に出入りができ、また母方の従兄である

張文禎がいたタヒチに移住した〔畑中 1967：99、129〕。李寿は、この本が刊行された時点で70歳半ばを超えていると書かれていることから、1890年頃の生まれであると推測される。タヒチでは19世紀半ばに綿花プランテーションの労働者が数千人規模でタヒチに来島したが、プランテーション経営が破綻すると大多数の中国人が帰郷した。現在のタヒチの中国系住民の祖先は20世紀前半に商売目的で広東省から移住した商人であり、その移住の第一波が1909年から1914年にかけてであった〔cf. 河合 2024：14-15〕。李寿はこの第一波に乗じて移住した中国系移民であるといえる。

この本が興味深いのは、タヒチで多くの中国系移民が集まるタヒチ島やライアテア島ではなく、中心部から遠く離れたプカルア環礁のトゥアモツ諸島を対象としていることである。李寿は、しばらくタヒチ島にいた後、従兄の張文禎や弟の李綿棧の商売を引き継ぐために、1944年にプカルアにやってきた。李寿はプカルアの土を踏んだ5人目の中国人であった。李寿を含む5名のうち4名がプカルアの地で定住し、子孫を残した。一見したところプカルアの全島民が純粋なポリネシア人のようだが、実のところ中国系の血が混じっている人びとがすでにそこに住んでいるのだと、畑中は指摘する〔畑中 1967：129-130〕。

畑中は、李寿とその家族の観察を通して、プカルアに住む中国系移民の言語、文化、およびポリネシア系住民との関係にも触れている。

まず、言語について、移民一世である李寿は主に中国語を話した。李寿の妻はポリネシア人で、娘のマリーは父とは中国語、母とはタヒチ語またはトゥアモツ語、学校ではフランス語を話していた。畑中は李寿とうまく意志疎通が図れなかったため、マリーに通訳を頼んでいたのだという。李寿は、言語だけでなく、風俗・習慣の点で中国のそれを継承していた。彼は、中国式の墓の前に線香をたいて参拝するという祖先崇拝の形式を維持していた。だが他方でカトリックも信じ、毎週日曜日に教会に礼拝していた〔畑中 1967：98-99、156〕。

李寿は、商売で成功し豊かであった。当時のタヒチは外国人が土地を所有することを禁じていたが、彼はプカルアで7カ所に土地をもっていた。ポリネシア系の島民は、ドライな金のやりとりをする李寿に不平不満を漏らしながらも、土地の貸借関係が結ばれていた。ポリネシア系の島民は李寿がもつ物品にも頼っていた。たとえば、彼がタヒチの中国人の店から持ってきた「ファオテ」という薬は、疲労や筋肉痛、神経痛を治すものとして重宝されていた。当時、中国系移民はフランス人らと同等に「上等な」人びととみなされ、中国人との間に生まれた混血児も「タマリキ・ブルム」と呼ばれ、卑しまれずに済んだのだ

という [畑中 1967 : 83、89、184]。

拙著『南太平洋の中国人社会』[河合 2024] で整理したように、タヒチの華僑華人をめぐる研究はすでに英語、フランス語、中国語で少なくないが、その大多数はタヒチ島とライアテア島を対象としており、プカルアの華僑華人をめぐる記録はいまだに限られている。その意味で、本書がフィールドワークから得た情報は、華僑華人全体にとってもいまだに高い資料的価値をもっている。1960 年代というと、アメリカの人類学者であるリチャード・モエンチがライアテア島でフィールドワークを実施した時期でもある [Moench 1963]。モエンチは、タヒチ島やライアテア島などを結ぶ中国人移民の交易ネットワークが存在していたことを述べているが、畑中の調査記録は、そのネットワークがさらに遠いプカルアにまで広がっていたことを示唆している [畑中 1967 : 129-130]。プカルアでは、中国人がもたらす物質は「文明的」なものであり、彼らの活動はカトリックとよい勝負であったのだという [畑中 1967 : 131]。

批評と展望

本書は——もちろん専門書でないこともあるが——中国研究畑の出身である筆者からすると、物足りなさを感じなくもない。たとえば、畑中は李寿の話す言葉が「中国語」であると言っているが、この年代の広東省出身の老人は標準中国語を不得手とすることが多いから、李寿やマリーらが話していたのは、おそらく広東語か客家語であろう。従兄の張文禎の墓に刻まれていた「清色黄茂村」もどこなのか、広東省で長年フィールドワークをしてきた筆者でも想像がつかない。初期のタヒチの中国人社会では、客家と本地人（広府人）の間の区別が顕著であったといわれる。それならば、李寿が多数派の客家であるのか少数派の本地人であるかによって、その交易ネットワークや生活の様態がかわってくるだろう。だが本書はこの点については触れていない。

しかしながら、本書は、こうした問題を補って余りあるほど、オセアニストの視点から中国人とポリネシア人との関係、およびポリネシア人による中国人観を、巧みなタッチで描き出している。これらのデータは、中国系移民を主人公とし、中国的な特徴ばかり探し出して表象するタイプの華僑華人研究とは一線を画すものである。近年では、華僑華人研究の間でも中国の外で「中国探し」ばかりするのではなく、現地における中国人—非中国人の関係性をより実直に描き出していくべきとする声が高まっている [cf. 津田・櫻田・伏木編 2017]。オセアニアの華人の場合、中国研究者・華人研究者だけでなく、畑中のよ

うなオセアニアストの視点から中国との関係性を捉えていく、協働が必要となるであろう。

本書は、そのような可能性を感じさせる一冊である。すでに刊行から 50 年以上経ってはいるが、いま海域アジア・オセアニア研究の可能性を考えるうえで価値の高い古典書となっている。

参考文献

河合洋尚 2004『南太平洋の中国人社会——客家、本地人と新移民』風響社。

畑中幸子 1967『南太平洋の環礁にて』岩波新書。

津田浩司・櫻田涼子・伏木香織（編） 2016『「華人」という描線——行為実践の場からの人類学的アプローチ』風響社。

Moench, Richard U. 1963 *Economic Relations of Chinese in Society Island*. Ph.D Dissertation, Harvard University.

（かわい・ひろなお 東京都立大学）